

「オリオリ」

遠藤 雷太

〈登場人物〉

高橋 陽菜（たかはしはるな）

越野 朱音（こしのあかね）

清水 優希（しみずゆうき）

西 千夏（にしちなつ）

1.

バスケットの試合音が聞こえてくる。

高らかにホイッスルの音。

高橋陽菜（たかはしはるな）と越野朱音（こしのあかね）が声を上げる。

陽菜 あかねちゃん！

朱音 はるな？

二人、舞台の両端で正面を向いている。

朱音の部屋のドアを挟んでの会話しているてい。

二人とも必要以上に暑苦しい感じで。

陽菜 朱音ちゃん、部屋に、部屋の中に入れて！

朱音 いやだ！

陽菜 また一緒にバスケやろう！

朱音 いやだ！

陽菜 どうして！ みんな待ってるよ！

朱音 だって、あんなことがあって。みんなにあわせる顔がない…。

陽菜 みんな気にしてないよ。

朱音 怖い。

陽菜 怖くない。

朱音 帰って！

陽菜 今頃みんなに顔を見せにくいのはわかる。でも、みんな朱音ちゃんに会いたがってるんだよ。このままずっと部屋の中にいたらだめだよ！

朱音 はるなは私のことなんか何もわかってないんだよ。

陽菜 あかねのバカ。なによつ。ちよつとシュートはすしたくらいで学校にこなくなつちやうなんて。フリースローなんか誰だってひとつやふたつ外すよ。

朱音 でも、あのととき無理に行つてファールもらわずに、陽菜にパスすれば勝てたかも…。

陽菜 しかたないよ！ そりやくやしかったよ。でも、あかねはレギュラーだったし、わたしは違ったし、今じゃしかたないと思ってる！ だって下手だったもん、わたし。

朱音 はるな…。でも、わたし、

陽菜 だから、気にしないで。

朱音 でも、帰りの地下鉄のことだってあるし、

陽菜 誰だってゲロくらい吐くよ。

朱音 もう言わないで！ 地下鉄なんかで酔うなんて汚いし恥ずかしいし最悪！

陽菜 寝不足だったんでしょ。疲れてたんでしょ。暑かったし。試合でもあんなに動きまくって。模試の直前に練習試合入れる先生がおかしいんだよ。

朱音 でももう無理。帰って。帰って！

陽菜 わかった。わたしもすぐに出てきてもらえるなんて思ってたない。わたし、絶対にあきらめないんだから！

朱音 …はるな。

陽菜 …なに？

朱音 ありがとう。

陽菜 また…来るね。

ホイッスルの音。

陽菜（手ごたえを感じて）…よし。イメトレ終了。

2.

一月。冬休み中。

郊外にある朱音の家。

朱音は自分の部屋の中。

やや落ち着かない様子で陽菜を待っている。

陽菜は部屋の外。学校帰り風の格好。

かばんと大き目のシューズ袋を下げている。

先ほどと違い、緊張でガチガチの様子。

陽菜 朱音ちゃん！ へ、へ、部屋の中に入れて！

朱音 どうぞー。（普通にドアを開ける）

陽菜 ええっ!?

朱音 …? どうした?

陽菜 …フェイント?

朱音 何言ってるの？　　ってか、父さん、いなかった？

陽菜 いたけど、タバコ買ってくるって。コンビニに。

朱音 逃げたか。

陽菜 逃げた？

朱音 あの人、タバコやめたし。あ、どうぞ。

陽菜 女の子同士お気兼ねなくって。

朱音 ああ、言いそう。そういう当たり障りのないこと。

陽菜 うまくいってないの？

朱音 父さんと？　いや、別に。

陽菜 ってか、お父さんに怒られないの？

朱音 なんで？

陽菜 学校に行ってなくて。

朱音 「自分のやりたいようにやれ」だって。

陽菜 やさしい。

朱音 娘の扱い方がわからないからいつもものわりのいいフリをしている。

陽菜 てきびしい…。

朱音 実際、仕事忙しいみたいだしね。

陽菜 ああ。

朱音 で、どうしたの。…入らないの？

陽菜 え？

朱音 部活帰りでしょ。そこ寒いから風邪ひくよ。

陽菜 あ、ああ。(ぺこぺこしながら部屋に入る) いやあ。どうも。

朱音 …？

陽菜 いや、なんでもない。

朱音 …。座ったら？

陽菜 (座る) や、なんか、元気そうでよかった。

朱音 あれ？　なんかわたしもつと苦しそうにしてたほうがよかった？

陽菜 いやいや。

朱音 ごめんねー狭い部屋で。これでも掃除したんだけど。

陽菜 いやいやいや。

朱音 雪つもってた？

陽菜 除雪入ってたから、普通。

朱音 そっか。…で？

陽菜 いや、だから、バスケット部。もうこないのかなって。

朱音 うーん。ちよっとね。

陽菜 みんな大会に向けてがんばってるよ。

朱音 うん。

陽菜 そろそろ一緒にどうかなあ。

朱音 どう？

陽菜 だから、一緒に出ようよってこと！

朱音 無理だよ。

陽菜 どうして。

朱音 もう半年までもに体動かしてないし、無理無理。

陽菜 そんなこと言わないで。

朱音 別に人数足りないわけじゃないでしょ。

陽菜 そういうことじゃないよ。

朱音 …？

陽菜 せっかくみんなで二年近くがんばってきたのに。

朱音 わたしは一年と半分。

陽菜 朱音ちゃんだけじゃないの、よくないよ。

朱音 そう？

陽菜 確かに今さらかもしないけど。

朱音 ほんと今さらだよ。

陽菜 ごめん…。

朱音 なんで謝ってるの？

陽菜 いや、あの。

朱音 別にわたし怒ってるわけじゃないよ。

陽菜 え？ そうなの？

朱音 うん。っていうか、なんで怒らなきゃならないの。

陽菜 だって。…いまさらノコノコ来ちゃってもさ。

朱音 それ、陽菜のせいなの？ 悪いの私じゃん。

陽菜 そんなことないよ！

朱音 …そうね。私が悪いわけでもない。カウンセラーの人にも言われた。

陽菜 カウンセラー？

朱音 最初のうちはね。

陽菜 今は？

朱音 今は別に。

陽菜 あのととき、どんな感じだったの。

朱音 正直あんまり覚えてないんだわ。次の日は学校行けたんだけど、そのとき…まあ、そのときもなんかいろいろあつてさ。そしてその次の日の朝、急に体が動かなくなつてた。試合のこととか思い出したら涙と体の震えがとまらなくなつて。そんなのが一ヶ月くらい続いたと思う。

陽菜 うわあ。

朱音 最初のうちは学校にも行こうとしたんだけど。今はもういいやつて感じ。

陽菜 バスケやめちゃうの？

朱音 もう無理でしょ。

陽菜 わたし、朱音ちゃんとまたバスケしたい。

朱音 なんて。

陽菜 だって、あんなに一生懸命やつてたじゃん。

朱音 ちよつと、がんばりすぎたのかもね。

陽菜 でも、バスケ楽しい超楽しいって言ってたじゃん。

朱音 わたし、若かったなあ。

陽菜 ずっと朱音ちゃんすごいなって思ってたし、わたしもこの半年がんばったし。

今ならもう少しいいところ見せられると思う。たぶん。

朱音 私は無理だよ。

陽菜 どうしても？

朱音 あのとときさ。十二キロやせたんだよね。

陽菜 え…。(じろじろ見る)

朱音 今は戻ったよ。

陽菜 ああ。

朱音 体重は戻っても、筋肉ごっそり落ちたし。

陽菜 いや、そういうことじゃなくて。

朱音 なに。

陽菜 また一緒にバスケやりたいの。朱音ちゃんと。

朱音 できる気がしない。

陽菜 そんなことないよ。

朱音 学校の周り何周も走ったり、筋トレやったり。今思うと、どうしてそんなことやれてたんだろって感じ。

陽菜 今でもできるよ。ちよつとずつやっていこう。

朱音 陽菜はどうして部活やってるの？

陽菜 どうして？ 楽しいから？

朱音 それでいいじゃない。そっか。陽菜は部活が大事。わたしは先のことのほうが大事。

陽菜 先？

朱音 もう、留年決まってるし、それなら高卒認定と受験用の勉強をやって大学デビュー目指す。

陽菜 学校やめちゃうの？

朱音 やめるっていうか、通信制の学校に切り替えるかもね。まだ本調子じゃないから、もうちよつと様子見てからになると思うけど。

陽菜 お父さんは？

朱音 好きなほうでいいってさ。一年や二年遅れたって、大学に入っしまえば気にならないからって。

陽菜 へー。

朱音 なによ。

陽菜 めっちゃ考えてんね。

朱音 そりゃね。人生かかってますから。そっちは？ 進路？

陽菜 まだわかんない。私立になるかも。

朱音 むしろ大丈夫なの。バスケばっかやってて。

陽菜 え？ え？

朱音 陽菜だっぴ一生にかかわることだよ。のんびりしすぎじゃない。

陽菜 お母さんみたいなこと言わないでよ。

朱音 (声色) はるちゃん。

陽菜 なに？なに？なに？

朱音 陽菜のママイ。

陽菜 やめてよ！

朱音 似てない？ はるちゃん。進路。どうするのおく？

陽菜 やめてったら！

朱音 …ごめんね。

陽菜 え。

朱音 心配かけて。

陽菜 心配なんて。

朱音 私は私なりにやってるから。

陽菜 うん。わかった。

朱音 時間大丈夫？ 今日は様子見つてとこでしょ。

陽菜 なんかお見通し。

朱音 ほんとにママイに怒られるよ。

陽菜 ママイって。じゃあ、もう帰る。あの、(また来ていい？)

朱音 また来てね。

陽菜 …いいの？

朱音 最近、同じくらいの子と話す機会なくってさ。勉強も遅れてると思うし、教えてよ。

陽菜 わかった。あ。友達もつれてきていい？ みんな心配してるから。

朱音 いいよ。でも先に教えといてくれるとうれしい。

陽菜 わかった。

朱音 彼氏でもいいよ。

陽菜 いないよ！

朱音 あ、ごめん。

陽菜 朱音ちゃんは？

朱音 人と話す機会すらないって言ってんだろ。

陽菜 ごめん。

朱音 …じゃあ、気をつけて。

陽菜 うん。

朱音 あ。

陽菜 なに。

朱音 あけましておめでとうございます。

陽菜 もう冬休み終わるけど。

朱音 なんか陽菜の顔見たら、やっと今年が始まった気がした。

陽菜 なにそれ。…あけおめ。

朱音 ことよろ。

陽菜 ことよろ。

朱音 またね。

陽菜、最初の立ち位置に移動。

陽菜 恥ずかしい！ 浅はかだった！ 朱音ちゃん。すげえ普通だった。それなのに助けてあげようなんて、どんだけ上目線なんだよ、わたし。でもでも、わたしにもできることがまだあるはずだ。そうだ。たとえば、勉強だ。朱音ちゃん不安そうだった。できるだけたくさん会って一緒に勉強するんだ。そして、いい感じになってきたら（バッグの中から片方だけの朱音のバツシユを取り出す）これ、ちゃんと謝ろう…。そんなこんなで四月になった！

3.

四月。

朱音の家。

朱音と陽菜と清水優希（しみずゆうき）が三人で勉強している。

陽菜 朱音ちゃん。

朱音 あー。ここに補助線引いて。あとは自分で考えればわかるから。

陽菜 おおー。朱音ちゃん。

朱音 あんた、大学行くんでしょ。

陽菜 行く。

朱音 簡単なほうだよ、それ。

陽菜 いやあ、朱音ちゃんというと勉強がはかどるはかどる。

朱音 おかしいでしょ。あんた、学校かよってるのに。

陽菜 いやあ、なんというかありがたみというね。

朱音 今日はがんばって5ページやるんでしょ。ほらほら。学力テストも近い近い。

陽菜 …。

陽菜、問題を解きながらも眠くなっている。

朱音 ええ…。（手をパン）

陽菜 うひっ！

朱音 集中！

陽菜 おきてます！

朱音 部活引退前にどれだけ周りから差つけられる気だ。おい。

陽菜 うい。

朱音 ほんと受験生かね。

陽菜 いやあ、三年生なんて実感わかないね。

朱音 そりゃわかるけど。

陽菜 この眠気がにくい。にくいよ。朱音ちゃん。

朱音 そりゃ練習練習で疲れてるのもわかるけど。春季大会も高体連もすぐでしょ。

陽菜 朱音ちゃん。

朱音 なによ。

陽菜 バスケ部戻る気になったの？

朱音 なんです。なつてないけど。

陽菜 だって、自分からバスケ部の話題ふつてくれて。

朱音 ないない。

陽菜 まだやめてないんでしょ。体動かすのきつかったら、マネージャーって手もあるよ。

朱音 ないって。

陽菜 みんな喜ぶと思うんだけどな。

朱音 あわせる顔ないでしょうが。いいから手を動かす。恥ずかしくないの。不登校に勉強教わつて。

陽菜 そりゃ、勉強だけやればいい人とは違いますから。

朱音 ほほう。それ、マジで言ってるの？

陽菜 あ、いや。ごめん。

朱音 やっぱり、部活つらいんじゃないの？

陽菜 そんなことないよ。楽しい楽しい超楽しい。

朱音 毎日毎日部活部活。春季大会高体連。気力体力空き時間、ごっそり削つてへとへとだ。ほんとうに楽しいならいいよ？ どうしてそんなに一生懸命やってるの？ 推薦取れるほどでもないし意味なくない？

陽菜 そんなことないよ！

朱音 陽菜さんは、どうして部活やってらっしゃるんですか？

陽菜 …楽しいから。

朱音 好きでやってるんだから勉強できない言い訳にしないように。

陽菜 別に部活言い訳にしてないじゃん。

朱音 じゃあ、ほかに…

陽菜 ほかに…？

二人、静かに勉強している優希をちらっと見る。

陽菜 関係ないよ。

朱音 そうね。ごめん、今のはデリカシーなかった。

陽菜 いやいや。

朱音 ごめんごめん。

優希 あの…。

朱音 なに？

優希 どうして、俺、ここにいろの？

陽菜 なんか、ごめん。

朱音 あ、私もごめん。いや、ほんとに陽菜が彼氏つくってくると思わなくて。

陽菜 いや、わたしも実はびっくりなんだけど。

朱音 ほんとごめん。私が軽はずみな約束したもんだから。

優希 約束？

朱音 彼氏できたら連れてきてねって。

優希 いいけど。ほんとに邪魔じゃなければ。

朱音 邪魔じゃない邪魔じゃない。ね。

陽菜 うん。

優希 邪魔だったら言って。

朱音 うん。あ、いや、邪魔じゃないからね。

陽菜 勉強しよっか！

朱音 そうね。ごめんね。

優希 大丈夫。

三人、勉強を再開する。

朱音 …どつちからコクったの。

優希 …俺。

朱音 あ、そう。…いつ。

優希 …新人戦の帰り。

朱音 へえ。…どこで？

優希 …校門の前のローソン。

朱音 うわ。そうなんだ。…どっか遊びに行った？

優希 …部活忙しくてあんまり。

朱音 へー。キス、した？

優希 …キスは、

陽菜 朱音ちゃん！ 尋問禁止！ ゆっきーも答えすぎ！

朱音 えー。気になるじゃん。

陽菜 限度がある。

朱音 でも、呼んできて、なにも聞かないのさ。

陽菜 だめ。やっぱり恥ずかしい。

朱音 めんどくさ。

陽菜 はいダメーダメー。

朱音 はー。じゃあ、なんか茶菓子でも持ってくるか。

陽菜 茶菓子って。

朱音 ちよっと待ってて。あ、私の部屋でエロいことすんなよ。

陽菜 しないよ！

朱音、部屋から出る。

優希 言った？

陽菜 行ったね。

優希 違う。言ったかって。

陽菜 …。

優希 ハル。

陽菜 言えないよ。(カバンを抱える)

優希 持ってきてる？！

陽菜 どうしよう。

優希 もういいんじゃない。半年も前の話なんだし。

陽菜 でも。

優希 知らんぷりしてりゃいいんだよ。

陽菜 そんな気もしてきた。

優希 忘れちゃえ。

陽菜 やっぱりだめ。忘れられたら苦労しないよ。もう何ヶ月も忘れられてない。それ。

陽菜 別に、バッシュなきや朱音ちゃんバスケットできないじゃん。

優希 まだやらす気だったんだ。

陽菜 …おかしいよね。

優希 つていうか、見たくないんじゃない。それ。

陽菜 う。

優希 思い出すよ。あのときのこと。

陽菜 うう。

優希 学校の上履き隠されたのとは違う。バッシュだよ。

陽菜 ううう。どうしたら。

優希 そんなに悩むならなんで盗んだんだ。

陽菜 盗んでないよ。いやあの、盗むつもりなんかなかったんだよ。ちよつと隠しただけっていうか。ちよつと困らせようと思つて。まさかこんなことになるなんて。

優希 それで半年も放置したってわけか。

陽菜 だから少しでも取り返したくて、こうして来てるんだよ。…ああ、仲直りしたら、いい感じであやまれると思つてた。

優希 (思い出しつつ) たしかにパスほしいところだったけどな。あんどきは。

陽菜 今は関係ないよ。

優希 で、どうよ。

陽菜 ん？

優希 いい感じであやまれそう？

陽菜 なんか、わたし…出口がない。

茶菓子を持って朱音が部屋に近づいてくる。

優希、困つてとりあえず陽菜を抱きしめようとする。

同時に朱音はドアを開ける。
不自然なポーズで硬直する優希。

朱音 …。

優希 …。

朱音 …。

優希 か、肩をもんでいたんだ。

朱音 どこをもんでたって？

優希 肩を！

朱音 もんだのか。

優希 肩だ！ 肩を。

朱音 完全に腕が首の後ろにまわってただろ。

優希 いや、それは。

朱音 いちゃつくならヨソ！ 場所提供して、勉強教えて、お菓子と飲み物まで用意して、ほんと何しにここに来てるんだよ。不登校相手にリア充自慢をしたいのか。いい根性してるな、おい。

優希 いや、だから。ごめ、

陽菜 そうだよ！ 自慢だよ！

優希 ええっ。

朱音 はあ？

陽菜 でも、勘違いしないで！ 私が朱音ちゃんよりイケてるってことが言いたいわけじゃない。私が言いたいのは…私が言いたいのは…高校生活って素晴らしい！

朱音 は？

陽菜 だから、高校生活は素晴らしい！

朱音 …説明してくれるんだよね？

陽菜 だから、朱音ちゃんは、自分の人生設計完璧に立てたつもりみたいだけど、全然そんなことないからね。そんなんでうまくいくなら、みんな学校休んでるんだから。そりゃ高校通ってたら面倒なことなんか山ほどあるよ。でも、いろいろ楽しいこともあるから。あるから！ だから、だからだよ、一緒に学校行くこ。学校いやなら、バスケやろう。みんなとやったら楽しいよ！（がんばってにっこり）

優希 …おまえ、すげえな。

朱音 …それで？

陽菜 …それで？？ それ、で???

優希 （陽菜の限界を察して）あ、タイムアウト。タイムタイム。…いや、陽菜、今日具合超悪くて。

朱音 …。

優希 朝から超熱っぽいって言ってたし。今日はこのくらいに？ ね？

朱音 …そうだね。

優希 じゃあ、おれら、帰るわ。いいよね。

陽菜 うん。

優希 じゃあ。

朱音 陽菜。

陽菜 ん？

朱音 …いや、ごめん。ちょっと怒りすぎた。いまは怒っちゃったけど、今までたくさん家に来てくれて、話してくれて、ほんとに助かってる。ありがとう（頭を下げる）。いや、それだけ。いつか言っておかきやつて思っ

陽菜 …。

朱音 あ、あと、よかったら、また来てね。ほんとに。

陽菜 …。（罪悪感で泣き始める）

朱音 え、どうした。そんなマジで怒ってないから。泣かないで。

陽菜 （だんだん泣き方が激しくなる）

朱音 ほんとごめん。ごめん。調子に乗った。

優希 あ、いや。大丈夫だと思う。あと、それ以上、おまえがあやまるな。

朱音 え。なんで。

優希 頼むから。

朱音 え、うん。なんで？

優希 なんでも。おまえが悪いんじゃないから。騒がしくてごめん。ほんと行くわ。

朱音 う、うん。優希くん、陽菜をよろしく。

優希 うん。

朱音 陽菜、またね。またね！

陽菜 うん…。

二人、部屋から出て行く。

陽菜は最初の立ち位置へ。

陽菜 あの日は親友への逆ギレから自己嫌悪、そしてガチ泣き。最低でした。高校生活は楽しい！ 勢いで言っただけはみたものの具体的に何が楽しいのか聞かれたら、わたしにはさっぱりです。もう、耐えられない！ 嫌われてもいいから、バツシユ隠しちゃったこと謝ろう。あした、あした朱音ちゃんにバツシユを返すんだ！ そんな決意を抱いて、三ヶ月がたちました。七月。

4.

朱音と陽菜が勉強中。

陽菜 「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず」

朱音 ん？ 意味は？

陽菜 覆水盆に返らず。

朱音 そうだっけ？

陽菜 流れた水は戻らないみたいな話じゃなかったっけ。

朱音 うーん。違うような気がするけど。

陽菜 声に出したほうが覚えるって。

朱音 なんだっけ。徒然草？

陽菜 方丈記だよ。

朱音 おー。ちゃんと勉強のこと考えられるようになったか。

陽菜 部活引退しましたからー。

朱音 おつかれさま。えらいえらい。

陽菜 ；朱音ちゃん。

朱音 なに。

陽菜 ；なんでもない。

朱音 ；そういや、最近、優希くん見ないけど、どうなの？

陽菜 別れた。

朱音 へー。えっ？ なんで。

陽菜 それは。ほら。男と女の間にはいろいろあるのよ。

朱音 え。え。四月だっけ。付き合いだしたの。え？え？（数える）。三ヶ月？ た

ったの。

陽菜 たぶんね。そんな感じ。

朱音 どうして。

陽菜 だから、男と女の間には；いろいろあるのよ。

朱音 いろいろも何もたった三ヶ月じゃん。

陽菜 正確には一ヶ月ちよつとね。

朱音 そうなんだ。つらくないの？

陽菜 そうでもないかな。部活引退したから顔も見ないし。

朱音 そんなもん？

陽菜 あれ？ わたしもっと傷ついてる感じのほうがよかった？

朱音 ；なんかそれ、聞いたことある。

陽菜 なつかしいでしょ。

朱音 そんな前じゃないよ。

陽菜 なんだろう、ゆつきーって、いつのまにか近づいてきて、知らないうちに離れていったかんじ？ いま思うと、ほんとにゆつきーのこと、好きだったのかどうかもよくわからんし。でも、友達もそんなもんだって言ってたしそんなもんなんじゃないかな。

朱音 私に一言もなしに；。

陽菜 だって、

朱音 ああ、そうか。またリア充自慢だって騒ぐか。

陽菜 あはは。

朱音 あのとときはごめん。反省してる。

陽菜 朱音ちゃん。バツシュ。

朱音 バツシュ？

陽菜 …。

朱音 …。

陽菜 …。

朱音 バツシュ、なに？

陽菜 あ、どうしたのかなあって。見当たらないから。

朱音 なに急に。

陽菜 だってバツシュなきやバスケできないでしょ。

朱音 まだ言うか。…なくした。

陽菜 なくしたんだ。

朱音 うん。

陽菜 へえー。でもなくてもバスケできるよね。

朱音 言ってることバラバラだぞ。

陽菜 そう？ あははっ。

朱音 今なら言ってもいいと思うんだけど。実はあの練習試合の次の日ね。部室に行ってみたら、私のバツシュがなくなってたんだわ。

陽菜 うん…。

朱音 あれ？って思って部室の中探したら、片方だけ見つかった。ゴミ箱の中で。あれは、きつかったなー。

陽菜 え…。

朱音 そのうち出てくるかなと思って、片方だけとっついてあるけど、しばらくそのまんまだな。

陽菜、自分で自分の頭をポカポカ殴る。

陽菜 ごめん、ごめん！

朱音 待て待て待て。あんたが悪いんじゃないから。そりゃ、こういう話するの気分よくないけど、私が自分の意思で話してることだから、気に病まないで。

陽菜 朱音ちゃん。朱音ちゃんそのバツシュさ…！！

インタホンがなる。

朱音 あ。ちよつとまって。千夏かな。

陽菜 ちなつちゃん？

朱音 ちよつと行ってくるわ。

朱音、陽菜を置いて部屋を出て行く。

陽菜 もう、言える気がしない。(身もだえしながら) あー。千載一遇のチャンスが。

違うんだよ、わーってなっちゃってシューズをアレしたけどね、もう片方がどこに行ったかなんて覚えてないんだよ。わざとじゃないんだよ、ごみ箱はー。：もう言えない。言えないよ。朱音ちゃん。言わなきゃいけないのに。：あ！今のうちにどっかに隠して、すべてをなかったことに…。

バッグからバツシュを取り出す。どこかに隠そうとする。

陽菜 いや、違うって。そういう問題じゃないんだよ。バレバレだし。ああ、もう、どうしたらいいんだよー。

朱音が西千夏（にしちなつ）を連れて戻ってくる。

陽菜、物音を聞いてあわててバツシュをバックに戻そうとする。バッグには戻せないが、テーブルの下の見えない位置に隠す。

朱音（ドアを開けて）どうした？ お腹痛いか。

陽菜 だいじょうぶー。

千夏 ういーす。

陽菜 ういーす。

千夏 陽菜、なんかひさしぶり。焼けた？

陽菜 いや、ぜんぜん。

千夏 気のせいかな。今年、そんなに暑くないもんね。

朱音 よく会うの？（千夏と陽菜は）

千夏 いや、どうかな。クラス違うし。

陽菜 そうだねー。

千夏 でも、一回顔見ておきたいと思ってたからよかったわ。会ってくれてありがとう。

朱音 いやいや。最近、勉強もマンネリ気味だったから。こっちも助かる。

陽菜 やっぱり部長いるとしまるよね。

千夏 もう引退したって。

朱音 もうそんなになるか…。

陽菜 でも、まだ部長って感じ。

朱音 そういえば陽菜。話途中だったよね。

陽菜 え。なんだっけ。

朱音 私のバツシュのこと。

陽菜 え。

千夏 なんがあったの？

朱音 いや、例の練習試合あったでしょ。あのあと、私のバツシュ、盗まれちゃってさ。

千夏（深刻に）なにそれ。初めて聞いたよ。

朱音 片方はいまだに行方不明。もう片方はゴミ箱で。

千夏　：ひどい。ひどい！　どうして言わなかったの？

朱音　いや、実際わたしひどかったし。しょうがないかなって。

千夏　しょうがないわけじゃない！　ひどくもない！　ああ、ほんとごめん。そのときに言ってもらえれば、犯人捜したのに！

朱音　いや、なんか犯人捜しで部活の中ギクシヤクするのいやだったから。先輩たち引退してこれからだぞって時だったし。

千夏　関係ないよ！　朱音、気を使わずだよ。あやまらせて。ほんとごめん。

朱音　全然。全然だから。ほんと、かえってごめん。まいったな。みんな引退してか
らなら話してもいいかなって思ったんだけど。

千夏　くやしい。もしそれがなかったら、朱音と一年長くバスケットできたってことですよ。

朱音　まあ、そうだったかもしれないね。でもそうじゃないかもしれないし。そんなにリアクションされると逆にちよつと困るかな。ね、陽菜。

陽菜　え？　どうかな。

朱音　それで、陽菜はバツシュの何の話をしようとしたの？

陽菜　なんだっけ？

朱音　なんだっけじゃないよ。

千夏　犯人、見つかったらぶん殴ってやる…！

陽菜　そ、そうね。言ったね。バツシュ。

朱音　うん。

陽菜　やっぱり…探そう？

朱音　なにを？　バツシュを？

陽菜　ううん。…犯人。

朱音　だからさ。もう気にしてないから。

陽菜　：そんなことないよ。だってさつききつかったって言ってたじゃん。あのときは、私たちに気を使って言わなかっただけなんですよ。次の日から体が動かなかったんですよ。自覚なかっただけで苦しかったんだよ。だから、犯人を見つけて謝らせるべきだよ。今からでも遅くないよ。

朱音　ありがとう。陽菜。でも気持ちだけで十分…

千夏　よく言った、陽菜！

陽菜　ちなっちゃん。

千夏　朱音、つらいかもしれないけど、やっぱり気になるよ。バスケット部以外は考えにくいから、選択肢は限られている。しっかり考えればわかるかもしれない。

朱音　でも、半年も前だよ。

千夏　わからなかったらそれでもいい。でも、捜さないのは気がすまない。名前、挙げていこう。私だっくてくやしい。どうかな。

朱音　千夏がそう言うなら…。

千夏　ありがとう。ちよつと待って。書くわ。(メモ取りながら)背番号順でいいか。4番、私。

朱音　いや、千夏はいいですよ。

千夏 それはフェアじゃない。6番タマオ、7番ミカ、8番コトコ、9番アリサ。そして10番が陽菜。あとは一年。あ、当時ね。空ちゃん、ひなた、ともみんな。朱音 さすが。すらすら出てくる。

千夏 どうだろ。とりあえず、ここまで。

陽菜 いやあ、いざ並べてみると、あやしい人……いないねえ。

千夏 まあね。みんな仲良くやってたと思うし、一年はかわいいし、このなかにバツシユ盗むような「バカ」がいるとは思えない。どう思う？

陽菜 そ、そうだねー。そんな「バカ」いないねー。

千夏 となると、男子かな。ノリでバカやつちやう子、いそうだけど。

朱音 いるかな。わざわざバツシユ盗んだり。

千夏 うーん、わからん。陽菜。

陽菜 なに。

千夏 ゆつきー呼んでいい？

陽菜 え、なんで？

千夏 あいつ、男女ともども顔広いから。何か知ってるかも。

朱音 ちよっと。

千夏 どうだろ。

陽菜 いいけど。

千夏 あいつ、家近いからすぐ来れると思う。（スマホ操作）話進めてて。

朱音 いいの？

陽菜 うん。大丈夫もう大分たってるから、普通に話すし。

朱音 ほんとに？

陽菜 あ、そうだ。朱音ちゃんのなかで、この人あやしいっていうのはないの？

朱音 わかんない。あのときは私がシュートはずして負けたわけだから、誰に恨まれてもおかしくないんだけど。

千夏 おかしいよ。練習試合なのに。

朱音 ；通りすがりの靴フェチ変質者。

陽菜 それは無理があるよ。

千夏 いまどき完全部外者は無理でしょ。

朱音 じゃあ、やっぱり顔知ってるひとなのかな。あんまり考えたくないけど。

千夏 そう考えると怖いよね。みんな仲良くやってたのに。

朱音 そうなんだよね。

千夏 男子のほうは？

朱音 男子いっぱいいるよ？

千夏 そうねえ。たとえば、ひどい別れかたした男子とか。

朱音 ええ。いな……いよ。（急に思い出す）

千夏 いまのいいよどみはあやしくない？

陽菜 うそでしょ。朱音ちゃん！

朱音 いないって。ほんとに。

千夏 誰、誰なの？

陽菜 教えて！ ひどい別れ方したの、されたの？

朱音 趣旨変わってる！

千夏 誰。

朱音 いや、梅林くん。知らない？ ちょっと前に話題になってたと思うけど。

千夏 …ああ、あったね。

陽菜 え、私知らない。梅林くんと付き合ってたの？

朱音 いや、コクられただけ。その場で断ったから、正直忘れてた。

千夏 私も忘れてた。

陽菜 いつ？

千夏 一年の冬休みくらい？

朱音 たぶん。

陽菜 当時から考えてもずいぶん前だね。

千夏 バッシユ盗むかな。

朱音 それで？ ないでしょ。さすがに。

千夏 どう思う。陽菜。

陽菜 …冤罪は、決して許されぬ。

朱音 なにその言いかた。

千夏 とりあえずピンとこないってことでいいのかな。

陽菜 はい。

千夏 でも、一応動機あり。容疑者その一。

朱音 わたしもあんまりピンとこないよ。

千夏 あとの男子はゆつきーに聞くとして、あとは？ 先輩とか。先生とか。

陽菜 先生だったら新聞に載っちゃうね。

千夏 載せたらいいんだよ。

朱音 ほんとだったらね。

千夏 どう。朱音。

朱音 っていうか、私、むしろ好かれてた方だと思うけど。

千夏 逆に？

朱音 いや、やめよう。そっちを深堀りするの。

千夏 陽菜、

陽菜 冤罪は、決して許されぬ。

千夏 またか。じゃあ、先輩がた。陽菜、

陽菜 冤罪は、決して許されぬ。

千夏 なに、そればっか。

朱音 待って。

千夏 なに？

朱音 陽菜。

陽菜 なあに？ 朱音ちゃん。

朱音 これも、考えたくなかったんだけど。

千夏 なに。

朱音 陽菜。

陽菜 …。なに？

朱音 あのさ。陽菜って、バツシユの話したときのリアクション、ムダに激しかったよね。

陽菜 え。そうかな。

朱音 最初は、私に気を使ってくれたのかなって思ったけど…わたし、大きな勘違いをしていたかもしれない。陽菜。

陽菜 え。

朱音 まさか、

陽菜 …。(覚悟を決める)

朱音 バツシユを盗んだ犯人…知ってるの？

陽菜 …え？！

朱音 じゃなきやあんなに動揺するはずがない。どうなの。

陽菜 (動揺) え！ うえ？ いや。あの。

千夏 マジで、陽菜？ 誰？

朱音 陽菜…。

千夏 誰。

陽菜 いや、あの…。ええ…！

千夏 誰。言いたくないの？ 言いたくない人なの？

陽菜 あ。い、いや、そんなことないよ。

朱音 無理に言えとは言わないけど。

千夏 いいや、言って。陽菜！

陽菜 あ、あの、あの、(冗談っぽく)たとえば、私とか！

千夏 バカじゃないの！？ あなた自分から犯人捜そうって言ったんじゃない。ねえ。

陽菜 (独り言) 違う、こうじゃないよ。

朱音 どうした？

陽菜 いや、だからそうじゃなくて。

千夏 陽菜！ あなた、悔しくないの。朱音が、仲間がひどい目にあっただよ！

朱音 千夏…。

陽菜 悔しい！

千夏 じゃあ！

陽菜 犯人…言う…。

緊迫した雰囲気のなか、インタホンがなる。

朱音と千夏、ちよっと目を合わせるが、無視。

陽菜 でも…。

千夏 がんばれ！

沈黙ののち、ゆっくり優希が現れる。

優希、ノックする。

優希 すみません…(静かなので不安)

朱音 あ、優希くん？ はいって。

優希 お邪魔します。…ああ、よかった。みんないて。(陽菜に)おう。

陽菜 ははは…。

千夏 は！

優希 …？

千夏、朱音のそばに移動。

千夏 (陽菜と優希を見て)まさか。そういうこと？

優希 なに、この雰囲気。

陽菜 いや、あの。実は朱音ちゃんのバツシユの件、犯人捜そうって話になってて。

優希 ええ？ なんでそんな話に。

千夏 ゆっきー？

優希 なに？

千夏 バツシユの件ってだけで、どうして話つうじてるのかな？

優希 え。え？

朱音 え、ウソでしょ？ 二人わかれたって。

千夏 ばかね。男と女の間には色々あるのよ。

朱音 え。そうなの？ そうなの、陽菜。

陽菜 あのね。実はわたしが…

千夏 もういい！ 言わなくてもわかった。

陽菜 ちなっちゃん！？

千夏 どうして、朱音のバツシユを盗んだの。

陽菜 実は、

千夏 優希くん！

陽菜 …ほへ?!

優希 なんの話？

千夏 とぼけないで。陽菜に聞いてみたら？

優希 (陽菜に)なんの話？

千夏 ほんとに聞くな！

優希 どうすれば。

陽菜 あーあの、あの！ 優希くん関係ないから。

千夏 陽菜がかばおうとする人なんて、あなたくらいしかないでしょ。知ってるん

だからね、元カレ！

優希 あ、そういう話？

千夏 なに、そのヒトゴトみたいな言い方。

陽菜 違うよ！ 私がバツシユ盗んだんだよ！

千夏 …… ゆつきー。陽菜に罪を着せて恥ずかしくないの！

優希 ええ…。

千夏 陽菜は優しいから、自分から言えなかったんだよね。つらかったよね。だから、代わりに私が言う。おい、清水優希！

優希 ……。

千夏 どうして朱音のバツシュ盗んだんだ。

陽菜 ちなつちゃん！

千夏 陽菜は黙ってて！ もういいから。大丈夫！

優希 (ためいき) 見てられん…。

千夏 なにが！

優希 …… そう。俺が盗んだ。朱音のバツシュ。

陽菜 ゆつきー…？

千夏 どうして！

優希 いや。むしろくしゃしてて。練習試合とかは関係ない。たまたま目についたバツシュを取って捨てた。なに？ 今日、俺を責める集まり？

千夏 優希。あんたってひとは。

陽菜 違うよ！ ゆつきーはかばってしてくれてるんだよ。ほんとわたし、私が盗んだんだ。ほんとに。信じて。

優希 ハル。

陽菜 なに！？

優希 おまえがフォローをすればするほど、二人の俺に対する疑惑が確信にかわっているんだぞ。

陽菜 え、なに、意味わかんない！

朱音 そうよね。一度、好きになった人だもんね。そう簡単に忘れられないよね。

陽菜 朱音ちゃん！ 違うよ！ さっき言ったじゃん！

優希 ま、俺が今さらおまえらに嫌われたって、そんなにダメージないから。

千夏 なんなの、その言い方。

朱音 優希くん。

優希 なに？

朱音 …… ほんとなの？

優希 ほんとだよ。

朱音 ほんとに？

優希 ほんとだって。

朱音 どうやって部室はいったの？

優希 どうやってって。普通に。

朱音 鍵は？

優希 かかってなかった。

朱音 私は、あの日、最後に部室を出たし、翌朝も朝練で一番最初に来た。鍵はかかってた。

優希 ー。そうだったかも。

朱音 鍵はどうしたの？

優希 いや、知ってるよ。鍵はホワイトボードの裏。男子だってそれくらいは知ってる。

朱音 それも違う。あのときは、ナンバーキーだった。もともと用具室だった名残り。

いまはちがうみたいだけど。そうでしょ。陽菜。

陽菜 …。

優希 そうだったかなー。

朱音 ゆつきーは、私のバツシュ盗んでいないと思う。

優希 …。

千夏 じゃあ、どうして。っていうか、誰。いまのなに？

朱音 わかった！ 白状する。…犯人は私！ 私の狂言。ウソ。ほんとにバツシュなんか盗まれていない。みんなに心配してほしくてめんどくさい女になってみた。みんな、ごめんね。騙しちゃって。

千夏 そんなわけないじゃん。

朱音 以上。この話はこれで終わり！

千夏 朱音。

朱音 やっぱり犯人なんか知りたくない。

千夏 でも、

朱音 私は、知りたくない！

千夏 朱音。ごめん。ゆつきーも。

優希 …。

朱音 じゃ、勉強…って感じじゃないか。さすがに。

照明変わって陽菜は最初の位置へ。

千夏と優希は出て行く。

朱音は物思いに耽っている。

陽菜

言い訳をさせてください。困った時には、人を頼っていいんだ。そう書いてありました。ネットに。自分が難しいと思った私は、皆に犯人を見つけてもらうと思いました。名づけて、「犯人はヤス」作戦。動画で見た古いコンピューターゲームが由来です。結果はご覧のとおり。無差別大量冤罪が発生し、挙句の果てに元カレ、被害者にまで告白させる大惨事。わや！ …言わなきゃいけないことと、実際に言えることは、まったく違います。私はもうバツシュのこと、言える気がしません。これ…(バツシュを取り出そうとするが、靴袋がない)を返す機会、は？ このこと、この、あれ。あれ？ はあ？ はあ？ えっ、うそでしょ。う、うそでしょ！ バツシュ、朱音ちゃんのとこに忘れた…。うわああ。うわああああ。

朱音、陽菜の忘れ物に気付く。自分のバツシュを見つける。
暗転。

十月。

朱音の部屋。

朱音と千夏と優希が勉強している。

朱音は集中できていない様子。

千夏 朱音。

朱音 …。

千夏 …朱音？

朱音 あ、うん。なに？

千夏 最近、どうなの？

朱音 いや、普通だよ。

千夏 なんだっけ、通信制？ はじまったんでしょ。

朱音 うん。

千夏 どんな感じ？

朱音 うん。まあ、時間はできたからね。じっくり志望校選びと大学受験の対策をさせてもらうよ。

千夏 そっか。

朱音 二人は？

千夏 まあ、ぼちぼちってとこかな。

優希 悪いね。場所提供してもらって。

朱音 いやいや。私も、今のうちに大学受験の話が聞けるのはありがたい。

千夏 ほんと真面目だなあ。ねえ。

優希 うん。

朱音 (突然) ダメだ！ わたし、あの子がわからない！

千夏 ひきずっている。

優希 やっぱりその話か。

朱音 なんなの。ある日突然やってきたと思ったら、何もしないでだべってるだけに勉強しよって言うってきたのに本人全然勉強しない。バツシユの犯人なのに一緒にバスケしようとか「犯人捜そう」とか意味がわからない。挙句の果てに…全然連絡来ないし。何なの。何がしたかったの。あの子。ねえ、どう思う？

千夏 いや、それは…。(優希と目を合わせて)

優希 (同時) 「らしい」よなって。

千夏 (同時) 「らしい」よね。

千夏 うわ、ハモっちゃった。

朱音 え、なに。らしい？

優希 あいつらしいなって。そういう支離滅裂なところ。

千夏 ある意味、一貫してるんだよね。

朱音 どういうこと？

優希 あいつのシュート、覚えてる？

朱音 え、なに。

優希 めっちゃ不細工なフォームの。

朱音 あ、覚えてるかも。

千夏 あれ、なんていうのかな。シュート。片手で打ってるのか両手で打ってるのかよくわかんないやつ。

優希 フォーム。招き猫みたいな。

朱音 たしか、私なおせって言ったと思う。

千夏 最初はみんなも止めてたんだけど、陽菜は絶対こっちのほうが投げやすいって。

優希 一時期、男子が面白がって真似してるうちにフォームガタガタになって禁止令が出た。

千夏 そりゃそうだ。

優希 しかも本人言うほどフォーム安定してなかったし。

千夏 そうそう！ まあ、たまに出てきて攪乱するには有効だったけどね。そこそこ入るし。

朱音 入るんだ。

千夏 そこそこ。

優希 練習はしてたよね。

千夏 してた。

優希 最後まで不細工だったけど。あ、フォームがね。

千夏 また朱音とのワンオンワン見たいなあ。

朱音 え、なんで。

千夏 だってさ。朱音って誰よりも腰落としてさ、絶対抜かせないディフェンスするじゃん。足腰強いし、マラソンとか速かったから。陽菜は、ほら、おかしから。

優希 オーソドックス対トリッキー。

千夏 そうそう、そんな感じ。あれ。これ何の話？

優希 だからさ。ずっとあやまりたくて色々悩んだあげく、その場の思いつきで、突拍子もないこととしてこじれちゃったんだろうなっていう。

千夏 …そうね。

朱音 あの子がそんな子じゃないっていうのも、悩んだんだらうなっていうのはわかるけど。肝心のどうしてあんなことをしたんだっていう…。私、嫌われてた？

優希 むしろ大好きだったと思う。

千夏 考えてもしょうがないんじゃない？ なんか虫の居所でも悪かったんでしょ。

優希 本人には聞いた？

朱音 いいや。

優希 なんで？

朱音 だって、あれ以来、全然連絡よこしてこないし。
優希 そっちからは。

朱音 なんでわたしから。

優希 …。

朱音 なに。

優希 あいつ、あの時から学校こなくなったぞ。

朱音 え…。

千夏 …。

優希 自由登校には早いよな。いいの？ ほっといて？

朱音 あのバカ！ ちよつとごめん。(スマホで陽菜へ発信)もし。陽菜。聞いたよ。バカ！ ちよつと今から出られる？ 出られるって聞いてんのよ！ わかった。あそこ。公園。あそこ公園。わかるでしょ。あの残念なアヒルのバネみたいな遊具がある公園。いますぐそこに来て。わたしもいくから。ふざけんな。いますぐ！ (電話切る)ごめん、私行くわ。父さんに言っておくから、いてもいいし、帰ってもいいから。わたし、こんなに腹たつたの初めてだ。

朱音、いったん出ようとして、引き返し、バツシユの袋を持って部屋を出ていく。

千夏 ゆっきー。

優希 なに。

千夏 あんたほんとウソツキだね。

優希 直接話したほうがいいと思っただけだよ。

千夏 出てっちゃったよ。

優希 …たまには外の空気吸わないとダメなんだよ。あいつら。

6.

日は落ちかけている。公園。

最初の立ち位置に二人。

離れているが、今度は向き合っている。

陽菜は戸惑っている。

陽菜 朱音、ちゃん？

朱音 陽菜。バカ陽菜。陽菜バカ。聞いたよ。

陽菜 ごめん。

朱音 ごめんじゃない。あんたね。私が変わりと平気そうにしてるもんだから勘違いしている。私は運がよかっただけなの。医者にも言われた。たまたま勉強好きだったし、もともと朝方だったから睡眠障害にもならなかったし、精神疾患にも、引きこもりにもならなかった。学校の先生とは全然あわなかったけど、家庭教師はいい人だった。不登校って言っても、私はほんとにめぐまれているほう。だから、陽菜、真似しちやダメ！

陽菜 朱音ちゃん。何言ってるの？

朱音 え。だから、学校行っていないって。

陽菜 誰が？

朱音 はるな…。

陽菜 わたし？

朱音 え？

陽菜 え？ 誰がそんなこと言ってたの。

朱音 え。

陽菜 行ってるよ。学校。普通に。

朱音 …あの野郎！

陽菜 朱音ちゃん。

朱音 なによ。

陽菜 ほとんど部屋着じゃん。

朱音 そっちこそ。

陽菜 私は急に呼び出されたからー。うっ。(急に泣き出す)

朱音 なに？

陽菜 だって、朱音ちゃんと、もう二度と話せないと思ってたから。うれしくて。ご

めんなさいで。

朱音 トリックー。

陽菜 なに？

朱音 なんでもない。はー。まあいいか。陽菜。

陽菜 え。

朱音 受け取れ！

朱音、バッシュ片方を取り出して片方ぼーんと投げる。

陽菜、(できれば)キャッチする。

陽菜 なに。え、なに？

朱音 わかるでしょ。

陽菜 …くれるの？

朱音 あげないよ！ ずっと謝りたかったんでしょ。

陽菜 うん。

朱音 気づいている？

陽菜 なに？

朱音 あんた、まだちゃんと謝ってない。

陽菜 あ。

朱音 だから、私もまだ許していいのかどうかわからない。

陽菜 あやまつたら、許してくれるの？

朱音 わからん。

陽菜 ええ？

朱音 実際に顔見て、謝られてみないとわからん。

陽菜 ええ…。

朱音 そんな目で見ないですよ。こっちだってあの時はいろいろ大変だったんだ。親とか。まあ、そっちはいいや。とにかく許すほうだって簡単じゃないんだよ。自分でもどうなるかわからないから、こつからやりなおしてみることにした。それで、私がどんな気持ちになるか試したい。そういうこと！

陽菜 朱音ちゃん。

朱音 なに。

陽菜 言ってる意味がぜんぜんわかんないよ…。

朱音 あんたに言われたくないよ！ 今まで散々振り回してきたくせに！

陽菜 ごめん。

朱音 いいよ。あなたが謝りたくないなら別に。交通事故にでもあったと思ってあきらめる。あんたが私に許してもらおう必要なんでぜんぜんいいしね。ただね、これだけは言っとく。

陽菜 うん。

朱音 やっぱり、あなたには感謝している。どんだけ感謝してもしきれない。あのとき、私がどんだけ不安だったかわかる？ 高校いけなくなって、体も動かなくなってる、人生終わったと思ったよ。どん底。超どん底。そんなときにいきなりあんたがやってきて。ずうずうしくも毎日のようにうちにあがりこんで、うっとうしいこともあったけど、それでどんだけ私がつくわれたことか。どんだけ！

陽菜 でも、原因作ったの私…。

朱音 きっかけ、だから。ほんとにそれだけだったら、私もあんなにダメーシ受けなかった。やっぱりもともと無理してたんだと思う。だから、全部あんなのせいにするのも違うと思ってる。だから、陽菜。一回だけ私の茶番に付き合っ…。

陽菜 …お願い。

陽菜 …わかった。やる！ …朱音ちゃん！

朱音 あのとき、

陽菜 …バツシユ盗んじやっごめん…。

陽菜 …バツシユ盗んじやっごめん…。

陽菜 …バツシユ盗んじやっごめん…。

朱音 …バツシユ盗んじやっごめん…。ほんとに茶番だったね！
 朱音 そもそも。なんで半年たってから謝ろうと思ったの？ 高校生活の何がすばらしかったの？ ほんとにすばらしかったの？ バツシユの犯人を自分から捜そうって言ったのなんで？ ゆっきーとはどこまですすんだの？ 結局、私のことはどう思ってるの？ 好きなの？ 嫌いななの？ あと、

陽菜 待って！ パンクしちゃう。一度に言われても！

朱音 でももう少し詳しく教えてもらえないと許すも許さないもわからないし…。

陽菜 じゃあ、あとで文章にまとめて送ってください…。

朱音 えー。

陽菜 大事なことだと思うから。

朱音 わかった。じゃあ、全部答え終わったら、あらためてバツシュ返しにきて。

陽菜 うん。

朱音 陽菜。

陽菜 なに。

朱音 回りくどくてごめん。でも、私はあなたを許したい。これはほんと。だから、頼むね。

陽菜 うん。

二人、正面を向く。

陽菜は話しながら着替える。

朱音も陽菜の話を聞きながら仕事着に着替える。

陽菜 (正面向く) それから、すぐに朱音ちゃんから膨大な量の質問一覧が届きました。私自身、どうしてあの時あんなことをやっちゃったんだろうと思うことばかりで、ほんとに答えるのが大変でした。折に触れて思い出しては、ああでもないこうでもないという布団の中でぎゃあぎゃあ叫びつつ、ジタバタしつつ、どうにかこうにか、少しずつ、答えを送っていききました。私は朱音ちゃんが大好きで、あの瞬間パスがもらえなかったのが心底悔しかった。そんな簡単なことが言葉にできるまで：(着替えが終わらなかつたら繰り返し調整)：そんな簡単なことが言葉にできるまで：なんと十二年かかりました。

朱音 なげえよ！

陽菜 秋。(電話) もしもし。：どうだった、なんとなく伝わった？

朱音 (電話) 伝わったけど、ほとんど他愛のない近況報告だったから大事なところピックアップするの大変だったわ。

陽菜 引越したんだって？

朱音 うん。あんたは仕事変わったって聞いたけど、慣れた？

陽菜 うん。ぼちぼち。：朱音ちゃん。

朱音 ん？

陽菜 バツシュ、返しに行っている？

朱音 ；それなんだけどさ。

陽菜 ええっ。(不安)

朱音 いや、あの、そうじゃなくて。実家に置いといたら、父さんが間違っただけ分しちゃって、その…。

陽菜 朱音ちゃん、ひどい！ ひどいよ！

朱音 あんたが時間かかりすぎなんだよ！ なんなの、ほんとに！

陽菜 わたし、どうなるの？

朱音 ああ、許す許す。

陽菜 そっちこそなんなの、その軽い感じ！

朱音 さすがに待ちくたびれた。もう、水に流そうよ？

陽菜 ええ…。

朱音 じゃあ…おめでどう！ もう陽菜は、いや、私たちは自由だー！

陽菜 自由だー！ ありがとう！ ねえ、これからどうしよう。15

朱音 どうしようって言われても。じゃあ、ひさしぶりにワンオンワンでもやろうか。

陽菜 今になって？

朱音 あのとかなら一年半のブランクは大きいけど、十二年たった今なら、たったの一年半だ。

陽菜 うわー。負けず嫌い。さすがにそれは引くよ。朱音ちゃん。

朱音 うるさい。仕事何時に終わる？

陽菜 八時！。

バスケットの試合音が聞こえてくる。

ホイッスルの音。

二人、仕事着のまま、バスケットコートに移動したてい。

朱音 (ボールを持っている) おお、なつかしい。どう？ 朝起きたら体の節々が意

味もなく痛かったりしない？

陽菜 朱音ちゃんはするんだ。(パス)

朱音 うるさい。(うけとる)

二人 : 勝負！

陽菜はオフエンス、朱音のディフェンス。

ワンオンワンが始まる。

暗転。

「オリオリ」おわり